

震災の中で教会を再発見する¹

小平牧生

はじめに

筆者は、1995年1月17日に兵庫県南部を中心に起こった阪神・淡路大震災の被災地域にある教会の牧師である。私たちの教会のある地域は最大震度7を記録した兵庫県西宮市南部に位置し、教会は震災直後に西宮市の指定避難所に指定された。同時にワールド・ビジョン・ジャパン、日本国際飢餓対策機構の現地事務所が置かれた。当時筆者は近畿福音放送伝道協力会²の事務局長であり、また震災後に阪神地区にあるキリスト教会によって結成された「『We Love

¹ 本小論は2012年4月16日に行われた「日本福音主義神学会西部部会2012年度春季研究会議」における発題を土台としている。筆者は、阪神・淡路大震災の被災地域にある教会の牧師の立場から発題した。その研究会議のテーマは次のとおりである。

「神の国のホーリスティック宣教—東日本大震災をうけて：東日本大震災という現実の中で、教会がローザンヌ誓約などに表されているホーリスティック宣教をどのように理解し、どのように取り組んできたかを検証し、その取り組みの背景にある神学的理念を浮かび上がらせ、今後の教会の取り組みに対する神学的示唆を与える。」

² 近畿福音放送伝道協力会は福音放送伝道を目的とした教会協力団体であり、協力教会の範囲は近畿二府四県におよんでいる。阪神淡路大震災の被災地域全体がその協力教会の範囲に含んでいることもあり、震災後に日本福音同盟その他の団体によって結成された「阪神淡路大震災被災教会復興支援協力会」の事務局が同協力会内に置かれ、その実務を同実行委員会が担うこととなった。

阪神！』大震災復興ミニストーリー」³の事務局を担当することになった。2011年3月の東日本大震災においては、所属教団の東北教区担当理事、同時に日本福音同盟東日本大震災対策室の一員として被災地域の教会に対する復興支援活動に今日まであたっている。

I. 阪神・淡路大震災が問いかけたこと

阪神・淡路大震災は、筆者の人生、そして仕えている教会のあり方に対して具体的な変化をもたらした。筆者は震災から二年余が経った1997年秋に一年間の休職期間を得て教会の現場を離れた。振り返ると被災地域は復興への道を歩み出したばかりであり、責任が与えられていた「阪神大震災復興ミニストーリー」の働きも継続している中であったが、社会も教会も復旧から復興に進んでいこうとしている中で、震災当初から足を止めることなく走り続けてきた自分の歩みをそのまま続けることはできなかった。あの出来事によって問われた「教会とは何か」という問い、そこには「教会は何を伝えるのか」「何をめざすのか」「どうあるのか」「何をするのか」という問いが含まれるが、それらの答えがなければ、教会形成の働きを続けることはできず牧師としての召しに答えて生きることができない。そのためには、働きを止めて神と聖書の前に立つ時を持たなければならなかった。たとい見える状況が震災以前の状態で復旧したとしても、もはや震災以前と同じ歩みを繰り返すことはできなかったのである。

2011年3月に起こった東日本大震災の翌週、被災地に入りそこで繰り返す余震を経験した時、私は自分の心とからだですでに忘れていたことであった。そして、被災地を歩き被災地の教会を訪ねながら、自分がかつてあの阪神・淡路大震災に遭遇して何を考え、何を学んだのか、そしてその後どのように歩んできたのか、また歩んでこなかったのかを振り返ることになった⁴。

³ 阪神宣教祈禱会を母体に結成された。震災復興活動の記録集として2001年1月に「苦しみにあつたことは」、2005年9月に「主にあるものの幸せ」を発行した。

⁴ 東日本大震災発生後に「クリスチャン新聞」2011年3月27日号と4月3日号の「オピニオン」欄に記事を求められた時、被害状況の全容がいまだ明らかになっ

本小論では、地域教会の牧師の立場から、阪神・淡路大震災の被災と復興の具体的な経験を通して福音宣教と教会形成について考えていることを論じたいと思う。

最初に、阪神・淡路大震災の復旧また復興の働きにおいて、その後の自分の人生と教会の働きに対して問いを与えるきっかけとなったいくつかのできごとを記してみたい。

1. 進入禁止区域に置かれた教会

当時、私たちの教会の礼拝出席者の半数以上は電車か自動車を利用して礼拝に出席していた。ところが震災後には電車などの公共交通機関は被災によって不通になるとともに、教会の周辺区域は「緊急指定車両以外の進入禁止区域」として制限された。そのために教会員は自動車を利用して教会に来ることができなくなった。教会はそのような状況の中に突然おかれたのである。

その中で、教会員の多くは一人で聖書を読み祈りの時をもって礼拝をささげた。しかしある人にとっては教会に行くことができないことは礼拝そのものを休むことであった。彼らは交通手段の回復を待って礼拝に再び出席するようになった。

ところが一方で、ある人々は被災した状況の中で互いに食物や衣類を分かち合い地域の人々と助け合った。彼らはともに集まり食事をしつつ励まし合い、ともに聖書を読み互いに祈りあった。その交わりは日曜日にかぎられずそこには家族やクリスチャンでない人々も含まれていたのである。

このできごとは二つの意味で筆者に気づきを与えた。一つは消極的な面であるが、教会員の信仰生活が教会堂での行事に集中しているという事実である。生活の場での信仰生活について強調してきたつもりではあったが、今回のように実際に教会堂に通うことができず牧師との連絡も取れないという状態になっ

ていない中ではあったが、阪神・淡路大震災の経験から教会に与えられている希望と使命について記した。

た時、個人的な祈りの生活は保たれたとしてもそれ以上の信仰生活や働きは現実には中断する。それは、教会堂を前提にクリスチャンの育成や教会形成が行われて来たからであった。このことは、筆者自身のうちにも教会堂に人が集まるということを目指とする価値観や達成感があることを示した。

もちろん教会堂の持つ意義を否定するものではない。特に、教会堂が地域の人々の避難所となり、また地域コミュニティにとっての情報交換の場所になり、平常時は出入りしない人々が教会に出入りすることになった。緊急時において目に見える教会堂の存在も教会が地域に貢献できる重要な要件の一つである。

もう一つは積極的なことがらとして、教会堂に集まることができず牧師の働きを得ることができない中であっても、そこにいる信徒たちの集まりの中で教会としての働きが行われていたことである。その事実は宣教の可能性とともに教会の本質を知らされるべきことであった。福音は人から人に証しされ、愛のわざは人と人との関係を基盤にしたコミュニティにおいて行われる。それはプロジェクトとしてなされるのではなく、互いの存在と関係を基盤として行われる。危機の中で教会の生きた姿を見せられたのである。

2. 牧師の燃え尽き⁵

前述のように、筆者は震災直後から被災地である阪神間の諸教会による復興支援の働きを負うこととなった。しかし、自らが被災者であり、教会に避難者やボランティアを受け入れながら、同時に被災地域にある諸教会を支援する働きを行うことは想像以上に重い務めであった。

阪神・淡路大震災当時は、携帯電話やインターネットは現在のように一般的に普及してはいなかった⁶。それゆえ情報の伝達に関してはそのスピードと量において東日本大震災の場合とは大きく異なっていた。また、震災後二ヶ月を経た時期に、いわゆる地下鉄サリン事件が発生し一般の視線はオウム事件に向け

⁵ この項は、「百万人の福音」2011年8月号に記した記事をもとにしている。

⁶ 当時はパソコン通信が利用されていた。筆者は1996年6月に行われた日本メディア伝道協議会主催のニューメディア宣教セミナーにおいて「阪神大震災におけるパソコン通信」についての調査結果を発表した。その記録は阪神宣教祈祷会発行の「苦しみにあったことは」106頁以降に記されている。

られてしまったことは、被災地の者に精神的に強いストレスを与えた。

当時の手帳をみると、「今日も礼拝説教の途中でわけもなく泣いてしまった」と書かれているのを見ることが出来る。たしかに半年位経った頃から、感情のコントロールのむつかしさを覚えるようになった。大阪や東京に行けば普通の生活があり、やがて被災地の教会の中にも日常生活に戻って伝道集会などを積極的に行う教会も出てきた。被災地の教会にも復興を競うような雰囲気が出て来た。うまく説明できないが、置いて行かれるのではないかとという焦り、理解してもらえない苛立ち、思うように進んでいかない怒り、そして先が見えない不安などが自分のうちに満ちていたように思われる。

そのような状態にあった筆者にとって忘れられない二つの経験がある。その一つは、被災教会の状況を調べるために教会訪問を続けていた時のことである。交通手段の制限されている中で活動であり肉体の疲労は限界状態に達していた。訪問したその教会は不在であったために落胆を覚えた私に、教会の看板に貼られていた聖書のことばが目に入った。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人はわたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう。」(マタイ 11:28)

その聖句を見た瞬間、筆者はその場に膝から崩れてしまった。正直なところ自分に対して語られているみことばであるとは感じたことがなかった。しかし、疲れたからこそ主の招きに耳を傾けることができる。主のもとに行くことができる。そして疲れた者だからこそ主の安息を経験できることを知った。そこから回復が与えられ、続く復興支援の働きを進めることができた。

また、ある日一人の人が洗面器とタオルを持ってやって来た。「足を洗わせてください」と言うやいなや、私を座らせて私の足を洗い始めた。震災以降、「どのように他の人を助けるか」ということばかりを考えていた筆者にとって、自分が何かをしてもらおう立場に立ったのは初めてであった。

クリスチャンとしてまた牧師として、「自分がしてもらおう」ことより「だれかのために何かをする」ことが大切なことであると考えていた。しかしその結果は、燃え尽きと行き詰りであった。振り返ってみると、多くの人々が集い活発

な活動が行われる教会、疲れを知らない活動的な牧師、そういうものを思い描いていた筆者の生き方の基盤がいかにか脆弱なものであるかを知らされた経験であった。

実際に阪神・淡路大震災では復興の働きの中で牧師が疲れて教会の働きが閉じられた例がある。先に教会堂のことを記したが、同じように責任と働きが集中している牧師が倒れたならば教会はどのようにして働きを続けることができるであろうか。このこともまた教会形成の課題の中で大きな問題意識となり、その後のチームミニストリーやセルグループでの相互牧会へと進んでいきっかけとなった。

また、被災後のガウンも式文もない状況の中で行われた聖餐によって教会の復興への力を得たというある牧師の証⁷は、肉体の疲れの経験とともに、筆者にとって「からだ」についての関心を強くした。

3. 支援と分かち合い

震災後、教会の駐車場には救援物資が山のように積まれるようになった。そしてそこに近隣地域や避難所から生活の物資を求めて人々が毎日集まって来る。

ある日筆者が人々の対応をしていると、一人の女性が歯磨きを探しておられたが残念ながら全てなくなってしまうことがわかった。その時、私は牧師館の洗面所に買い置きの歯磨きがあることを思い出した。そしてそれを取りに行ってこの女性に差し上げたのであるが、その時に躊躇する思いが自分のうちにおこった。それは、筆者自身は被災者ではあったが自分たちのために支援物資を受け取ることをしないようにしていたからである。それはこれらの物資は地域の人々に与えられたのであり教会はそれをあずかっていると考えていたからである。それだけにまた自分自身のものを与えることには躊躇したのである。しかしその経験は支援と分かちあいについて考える機会となった。

災害時には被災地に多くの義援金と救援物資が届けられる。通常時には経験しないような金銭と物資の支援を受け、またその配布の責任と権限が教会に与

えられる。しかし教会にはそれを行うための準備や態勢は備えられていないことが多い。そのため特に牧師に責任が集中することになり、その難しさを覚えることも経験した。また多くのお金や物資の動く時には、人間の欲望がそこに動くことも現実の問題である。

たしかに被災直後の初期の救援段階には物資などの集中的な支援が行われなければならない。しかしそれは支援する側から支援を受ける側への一方的な働きであり、教会の本来の働きは自らに与えられたものを互いに分かち合うことなのである。それは一方的ではなく相互的であり、一時的ではなく継続的である。

筆者の関わりが与えられた働きにおいても、一方的な支援によって依存的な関係を造り出してしまった事例があった。救援段階における一方的な支援が大きければ大きいほど依存する関係を造りやすく、依存する状態から自立した状態に、そして相互依存の状態へと導いていくことは困難になることを知らなければならぬ。

II. 「キリストにある新しい共同体」である教会

阪神・淡路大震災の被災と復興支援活動の中であらためて問われた問いは、「教会とは何か」ということであった。実際、被災地域の教会は毎日の活動の中で、「教会は何ができるのか、できないのか、また何をすべきか、すべきでないか」、具体的な問題を前にしてその問いに答えていかなければならなかった。特に福音を宣べ伝えることと復興支援の働きとの関係について悩まされることが多かった。従来から「伝道と社会的責任」という教会の使命については学んではいたが、実際に「伝道」と「社会的責任」というこの二つがどのような関係にあるのかは十分に理解できてはいなかった。

あらためて創世記から黙示録までの聖書全体を読みなおすことから始めなければならなかった。それは教会や伝道というそれぞれのテーマについて聖書の特定の箇所を部分的に読むのではなく、天地創造から新天新地に至る聖書全体の枠組みの中で「教会とは何か」を問い直す作業であった。

当時、筆者は今回の研究会議に掲げられている「ホーリスティック宣教」と

⁷ 阪神宣教祈禱会「苦しみにあったことは」2001年1月、26頁